

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01586

研究課題名（和文）移住者支援の国際社会学～日比の支援者のライフストーリー分析から

研究課題名（英文）Transnational Sociology of Supporting Migrants : Life Stories Analysis of Migrant Supporters in the Philippines and Japan

研究代表者

小ヶ谷 千穂 (Ogaya, Chiho)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00401688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日比の間でJFCとその母親たちの支援運動を成立させてきた複数の社会運動の系譜を明らかにすることができた。また、こうした支援活動が、他のマクロな社会運動とつながりながらも独自の展開を見せてきたこと、さらには在日フィリピン人および日本人個人から派生した活動も存在し、そのこと自体が移民社会化する日本の姿を映し出していたこともわかった。また、支援者はそれぞれの使命感や情熱、コミットメントといったものと、もどかしさや葛藤とを同時に経験しながら、運動・活動の中で再帰的に変化していく存在であることも明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、30年近くJFCとその母親の支援運動にかかわってきた日比双方の支援者13名に対してライフストーリー・インタビューを実施した。それぞれの支援者たちは、現場の中で培ってきた経験から、次世代がその活動を継承するうえでの条件を具体的に挙げていた。2024年度末に書籍『移住者支援の国際社会学 日比支援者のライフストーリーから』（仮）として本研究の成果を春風社より刊行予定である。出版を通して、本研究で支援者たちから聞き取った語りを、次の世代に引き継ぐことに貢献できることは、移住者支援の国際社会学の樹立と、具体的な支援活動の次世代育成の双方に貢献すると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study was able to identify the genealogy of multiple social movements that have established support movements for JFC and its mothers between Japan and the Philippines. These support activities have developed independently while being connected to other macro social movements, and that there were also activities derived from Filipinos living in Japan and Japanese individuals, which in themselves reflected Japan's becoming an immigrant society. It also became clear that supporters have been recursively changing in their movements and activities, simultaneously experiencing a sense of mission, passion, and commitment, as well as frustration and conflict.

研究分野：国際社会学

キーワード：移住者支援 国際社会学 日比間の人の移動 JFC ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2017年～2019年度科研費基盤B「日比間の人々の移動における支援組織の役割 移住女性とJFCの経験に着目して」(課題番号17H02600 研究代表者・小ヶ谷千穂)の継続的な意味合いを持つ研究として計画された。上記研究では、「当事者」と「支援者」という二項対立の枠組みを越え、支援組織(NGO)もまた人の移動をめぐる「トランスナショナルな非国家的主体」(サッセン)であることを、過去30年に渡る日比間の人々の移動を事例として実証的に明らかにした。中でもJFC(日比国際児)と元エンターティナーの女性たちの支援に、早くから取り組んできた3団体(Batis Center for Women, DAWN, マリガヤ・ハウス)の活動に着目し、具体的には、以下の3つの異なる役割が支援組織によって実践されていたことを明らかにした。

[1]

- (1) 日比間の人々の移動を特徴づけてきた元エンターティナーの搾取的な移住労働とJFCの権利問題についての主要な言説生成主体としての役割。
- (2) 元エンターティナーおよびJFCが、家族や近隣コミュニティとは別に、経験を共有し新たなアイデンティティを構築する「第三の場」としての役割。
- (3) エンパワーメントやアドボカシーを目的とした日本社会とJFCとの文化的・社会的仲介活動が成人となったJFCの日本への就労目的の移動を促した、という移動の間接的仲介役割。

しかしながら、上記研究の中で問いとして残ったのは、なぜ支援組織を具体的に支える「支援者」たちがJFCや移住女性と長期に渡る関係性を、30年にもわたって維持できたのか、という点であった。同時に、調査を通して、活動を継続できずに現場を離れていったスタッフが少なからずいたこともわかってきた。こうした支援者の移住者支援活動への関与の継続・非継続の原因を具体的に明らかにすることができれば、支援組織の活動の持続性の条件を解明することが可能になる。それはすなわち、「人道的次元」の移住インフラ(後述)として支援組織が移住過程において果たす意義とその持続のための条件とを総合的に解明することにつながる。本研究が目指したのは、帰国者を含めた移住者への支援活動という人道的な移住インフラそのものを対象とした、新たな「移動の社会学」すなわち、「移住者支援の国際社会学」の樹立であった。

本研究が具体的な分析対象としたのは、1980年代からの日比間の移動を特徴づけてきた在留資格「興行」での女性エンターティナーの移動とその帰結としてのJFCたちの2009年の国籍法改正以降の新たな就労目的での移動である。「興行」ビザによる接客業に従事する目的でのフィリピンからの女性の搾取的な移動については、2005年に米国国務省より「人身売買の温床」との評価を受け、その在留資格の条件が「厳格化」されたことによって、一区切りを迎えたように見えた。しかし、2019年4月の入管法改正をめぐる議論の中で明らかになった、技能実習生制度や留学生の資格外就労を目的とした搾取的な移動の実態など、入管法上の「名目」と実際の就労の「実態」との乖離は現在も継続している。[2][3]

在留資格上の「名目」を構築するために、「サイド・ドア」での日本への入国および就労はさまざまな中間業者の存在を要請し、そこで搾取が行われてきた。在留資格「興行」という「サイド・ドア」を通じた搾取的かつきわめてジェンダー化された移動は、移住労働を終えて帰国した女性たちに多くの傷を残した。さらに日本人男性との間に生まれた婚外子であるJFCを持つシングルマザーとしての厳しい生活を帰国後に強いられる女性たちも多かった。

こうした中で、重要な役割を果たしてきたのが、元エンターティナーとJFCのために日比間でトランスナショナルに活動を展開してきた支援組織の存在であった。本研究は、日比間や日本と近隣アジア諸国の間での人の移動が今後ますます活発化していく状況の中で、過去の搾取的な移動の歴史を振り返り、とりわけそこで支援組織がトランスナショナルに果たしてきた役割に着目するという点で、これまでの移動をめぐる社会学にはなかった、歴史的な視点を備えた独創的な問題意識を備えている。

また、こうした問題意識は、近年登場してきた「移住インフラ論」を日比間の移動の実態に応用し、さらにその理論的精緻化を図るという学術的な貢献にもつながる。「移住インフラ論」とは、5つの次元(商業的・規制的・技術的・人道的・社会的)の移住インフラの相互作用から移動の促進あるいは制御の要因を探る議論である。[4]しかし、移住インフラ論においては、インフラ自体が果たす機能は着目されるものの、そのインフラを持続させる社会的条件そのものへの着目は不十分である。日比間の支援組織を長年にわたって支え運営してきた支援者、および活動を中断した支援者のミクロな経験に着目する本研究は、「移住インフラ論」をより進化・発展させるといった理論的な意義も持っていた。

同時に本研究は、従来は移動の「当事者」とはみなされてこなかった「支援者」や「支援組織」もまた、移動を構成し、移動を経験する重要なアクターである、という新たな視点を提供する。これまで国際社会学の領域においては、「人の移動」と、「トランスナショナルなNGO」とは、それぞれ独立して議論されてきた。[5][6]しかし、本研究を通して、国際社会学における重要な

テーマであるこの両者を接続した研究が実現されることで、新たに「移住者支援の国際社会学」という領域を国際社会学の中に打ち立てていくことが可能となる。

また、「移住者支援の社会学」の必要性は、学術的な要請・貢献にとどまらない。今後さらに移住者の増加が予測されている日本社会にとっては、日本で就労する移住労働者や生活者であるその家族への支援は喫緊の課題である。とりわけ国政レベルで移住者を包括的に支援しようとする政策がほとんどない日本において、市民セクターの役割は自治体や国の施策を支える上で、きわめて重要である。しかしながら、本研究が対象とする日比間の人々の移動を支援してきた団体に限らず、国内外を問わず多くの移住者支援組織にとって、現在その活動の持続性や次世代への継承が課題となり始めている。本研究は、とりわけ長い実践経験を持つ日比間の人々の移動の支援組織の主要なスタッフの活動経験をライフストーリー研究の手法を用いて分析し、「移動する人(帰国者を含む)を支える」ためにはどのような条件が必要なのかを具体的に明らかにすることで、今後のトランスナショナルな移住者支援活動を具体的に支える「人づくり」に貢献することも大きな目的とした。

長年の活動実践者のライフストーリー研究が当該分野の継承や次世代育成に大きく貢献することは、たとえば佐藤文香・伊藤るり(2017)[7]『ジェンダー研究を継承する』(人文書院、2017年)の成果からも実証されている。研究と並行して支援組織の活動にもかかわってきた本研究のメンバーにとって、「移住者支援の国際社会学」の樹立は、社会的な要請にアカデミズムの手法を用いて応えることができる、という意味で、これまでの申請者たちのトランスナショナルなアクション・リサーチの集大成とも位置付けることができると考えた。

2. 研究の目的

こうした学術的背景およびこれまでの自身の研究成果から引き継がれた研究課題をもとに、本研究では以下のような問いに答えることを具体的な目標として設定した。

- (1) 日比間の人々の移動において支援組織を長年にわたって支えてきた「支援者」たちが継続的に支援活動に関わることを可能にしたのはどのような条件だったのか。
- (2) これまでの継続的な活動を通して、「支援者」たちはどのように日比間の移動を(間接的に)「経験」し、またそれをどのように理解してきたのか。
- (3) (1)、(2)を通してトランスナショナルな移動のインフラストラクチャーとしての支援組織・市民社会セクターを社会学的に分析することで、これまでの国際社会学をどのように刷新することができるのか。

3. 研究の方法

本研究では、1. 研究開始当初の背景、で述べた問いに基づいて、以下のような研究方法で研究を遂行した。

- (1) 日比間の人々の移動に関わる支援組織に長年携わってきた支援者のライフストーリーの収集。具体的には前年度までの研究の主要な協力団体であったフィリピンおよび日本に拠点を置く3つの団体を中心に、主要なスタッフへのライフストーリー・インタビューを行った。
支援活動に関わることになった経緯から、活動経験の推移、そして活動を通して遭遇した困難や課題と、それをどのように克服したのか、また将来に向けてのビジョンなどを総合的に聞き取った。
- (2) 日本国内を主要な拠点としながら長く在日フィリピン人コミュニティの支援に、主に個人として関わってきた代表的な支援者に同様の内容のライフストーリー・インタビューを行った。
- (3) (1)、(2)で収集したインタビューを代表者・分担者で共同で分析し、a) 支援者が活動に関わることになったきっかけの時代的背景、b) 活動の中で培われてきた支援活動におけるポリシー、c) 支援活動の継続を可能にした社会的条件、d) 活動上の困難とその克服方法、e) 次世代の支援者に期待すること、という複数の分析軸に置いて個別のインタビューを整理・分析し、マッピングを行った。
- (4) 研究成果を調査対象者および広く社会に還元するための、書籍出版の準備を行った。

4. 研究成果

本研究を通して明らかにできた成果としては、以下の点が挙げられる。

- (1) 日比の間でJFCとその母親たちの支援運動を成立させてきた、マクロ・レベルでの複数の社会運動の系譜の存在。

- (2) JFC と、元エンターティナーの母親とをフィリピンと日本の現場で支える活動は、(1) のマクロな社会運動とつながりながらも、メゾ・レベルで独自の展開を見せてきたこと。
- (3) 在日フィリピン人および日本人個人から派生した活動も存在し、そのこと自体が移民社会化する日本の姿を映し出していること。
- (4) (2) および (3) に共通して、支援者がそれぞれの使命感や情熱、コミットメントといったものと、もどかしさや葛藤とを同時に経験しながら、運動・活動の中で支援者たちも再帰的に変化していく存在であること。すなわち、「移住インフラ」の一部としてだけでなく、この運動や支援活動そのものが、「日比間の人の移動」を構成している、という視点の獲得。

- (1) 日比の間で JFC とその母親たちの支援運動を成立させてきたマクロ・レベルでの複数の社会運動の系譜：

代表的な支援団体の設立からかかわってきた支援者たちのインタビューからは、JFC とその母親たちを支援する活動が、1970 年代からのフィリピンにおける反マルコス運動、反植民地主義運動、労働運動、女性運動といった複数の社会・政治運動を経験した人びとによって始められたことが明らかになった。1980 年代末から 1990 年代初めに始まった JFC とその母親の支援運動は、フィリピン社会そして日本社会双方にとって「新しい」社会課題であり、支援組織の立ち上げにあたっては、上記の諸運動において培われたネットワークが大いに寄与していたことがわかった。同時に、その頃から始まっていた従軍慰安婦問題への取り組みを始めとするアジアの女性たちとの連帯を目指す日本のフェミニストたちと、フィリピンの支援者たちとの出会いも、JFC 支援運動のもう一つの系譜となっていた。さらに、日本における反開発主義運動、「南」の国々の人びとや、その頃にやはり「新しい」社会課題として浮上し始めた超過滞在者を含む外国人労働者との連帯を目指す運動と、JFC の支援者とのトランスナショナルな連携も、ほぼ同時に生まれていた。こうした複数の社会運動の担い手たちが出会い、相互に関わり合う中で、JFC とその母親たちの権利をめぐる日比間のトランスナショナルな連帯が生まれた。

- (2) JFC と元エンターティナーの母親とを、フィリピンと日本の現場で支える活動のメゾ・レベルでの独自の展開：

日本とフィリピン双方で、具体的な支援活動に携わってきた人たちへのインタビューからは、(1) のマクロな社会運動の系譜に連なるものの、そこから「JFC 問題」への取り組みが独自の展開を見せたことが明らかになった。1990 年代の日本における教会関係のバックアップによる初期の移住者支援活動を通して JFC の支援運動にかかわった支援者たちの中には、フィリピンでの社会運動経験者と、日本でフィリピン移住者と出会ったことによって支援の世界に入った人たちが共存していた。また、2000 年代に入って JFC の支援運動がある種の定着を見ることがになると、「日本人の父親を捜す」という活動から、日本の国籍法の改正を求める運動など、より日本社会およびフィリピン社会全体に強い影響をもたらすような運動へと、JFC の支援運動は展開を見せることになる。

- (3) 組織に属さない個人から派生した支援活動：

JFC への支援運動が独自の展開を見せ始め、特にフィリピン社会において定着し始めた時期は、同時に日本社会において在日フィリピン人の定住化傾向が進み始めた時期でもあった。特に日本人との結婚を通してすでに相対的に安定した生活環境を得た在日フィリピン人女性の中には、自らの経験をもとに、日本で暮らすエンターティナーの女性たちやその子どもである JFC の支援活動に携わる人たちも出始めた。名古屋や東京では、先行して日本に定住していた在日フィリピン人女性たちが、個人として支援活動を始め、日本人支援者を巻き込む形で団体になっていく、という支援活動の展開も、インタビューから明らかになった。また、在日フィリピン人コミュニティとの日常的な出会いの中から支援活動に関わるようになった日本人支援者が、その後より包括的な外国人支援の道へと進んでいったケースもあった。

- (4) 再帰的に変化していく日比の支援者たち：

本研究においてインタビューを実施した 13 名の支援者たちすべてから、JFC とその母親の支援活動が、きわめてゴールが見えにくい運動であることが語られた。日本人の父親と、婚外子である JFC が再会を果たすこと、経済的支援を得られるようになること、日本国籍を取得できるようになること、個人としての尊厳を回復すること、といった個人レベルの達成と、日比双方の社会や政府に対してこの問題について訴えることや、政策提言をすること、あるいは人身取引の問題として JFC とその母親の問題をフレーミングするといった社会運動的な達成との間で、現場を支える支援者たちはいずれも、多くのもどかしさや葛藤を抱えていた。支援対象者たちとの人間関係に疲弊した支援者もいた。しかし同時に、いずれの支援者も、運動・活動の中で、フィリピン人女性の海外就労や JFC の存在、さらには困難を抱えた移住女性と子どもたちに対する自らの価値観が変化していった過程を吐露していた。JFC の支援活動は、「移住インフラ」の一部

であるだけでなく、この運動や支援活動そのものが、「日比間の人の移動」を構成し、そこに関わる支援者たちの人生をも、その中に巻き込んでいったと言える。

またそれぞれの支援者たちは、現場の中で培ってきた経験から、次世代がその活動を継承するうえで重要な条件として、「情熱」と「使命感」を挙げていた。本研究が支援者たちから聞き取った語りは、そうした「情熱」と「使命感」を、次の世代に引き継ぐことに貢献するべく、2024年度末には書籍『移住者支援の国際社会学 日比支援者のライフストーリーから』（仮）として春風社より刊行予定である。

<引用文献>

- [1]小ヶ谷千穂・大野聖良・原めぐみ「日比間の人の移動における支援組織の役割：移住女性とJFCの経験に着目して」『フェリス女学院大学文学部紀要』2020年3月。pp. 27-55.
- [2]巢内尚子『奴隷労働 ベトナム人技能実習生の実態』花伝社、2019年。
- [3]小ヶ谷千穂「『移民政策』を忌避する『移民国』日本： サイド・ドア 政策の限界を見据えるために」『アジェンダ』63号、2019年。pp.35-44.
- [4] Xiang and Lindquist, 2014, " Migration Infrastructure, " in *International Migration Review*, Vol. 48. pp.122-148.
- [5]梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会、2005年。
- [6]樽本英樹『よくわかる国際社会学（第2版）』ミネルヴァ書房、2016年。
- [7]佐藤文香・伊藤るり編『ジェンダー研究を継承する』人文書院、2017年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ogaya Chiho, Ono Sera, Hara Megumi	4. 巻 online
2. 論文標題 Roles of support NGOs for migration between the Philippines and Japan: Focusing on the experiences of migrant women and Japanese Filipino Children	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Sociology	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ijjs.12159	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野聖良	4. 巻 29
2. 論文標題 「日本の招聘業界からみる在留資格「興行」をめぐる言説編成 業界機関誌『入国ジャーナル』を中心に」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野聖良	4. 巻 9
2. 論文標題 在留資格「興行」とは何だったのか 入国管理行政と招聘業界における言説に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 経済社会とジェンダー	6. 最初と最後の頁 掲載予定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原めぐみ	4. 巻 74 (3)
2. 論文標題 グローバル・ハイパガミー再考 フィリピン人結婚移民への調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 378-396
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂	4. 巻 Vol.49 No.13
2. 論文標題 移住家事労働者から考える、「らしさ」の境界線	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小ヶ谷千穂・原めぐみ・大野聖良	4. 巻 第4号
2. 論文標題 ソーシャルワーカーとして、JFCとその母親たちに寄り添う マリガヤハウス・河野尚子の活動経験から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会運動史研究	6. 最初と最後の頁 150-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原めぐみ, 甲田菜津美, 瀬戸麗	4. 巻 vol.104(13)
2. 論文標題 コロナ禍の外国にルーツのある親子を地域で 支える: Minami こども教室の取り組みから見えてくるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊福祉	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原めぐみ	4. 巻 23号
2. 論文標題 移民の言語: セーフティネットとしての言語 大阪ミナミ: コロ ナ禍が浮き彫りにする「ことばの壁」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 多言語社会研究『ことばと社会』	6. 最初と最後の頁 269-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ogaya Chiho	4. 巻 47
2. 論文標題 Intergenerational Exploitation of Filipino Women and Their Japanese Filipino Children: “Born out of place” Babies as New Cheap Labor in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Critical Sociology	6. 最初と最後の頁 59～71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0896920520935626	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原 めぐみ	4. 巻 24
2. 論文標題 ヤングケアラーになる移民の子どもたち：大阪・ミナミのケーススタディ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 多民族社会における宗教と文化：共同研究	6. 最初と最後の頁 43～52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20641/00000584	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大野聖良	4. 巻 18
2. 論文標題 資料報告 日比NGOによる移住女性とJFC支援の歴史とその意義に関する一考察 DAWNとJFCネットワークの機関誌を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6. 最初と最後の頁 125-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 小ヶ谷千穂
2. 発表標題 移動に生まれ、移動を生きる子どもたち：フィリピンのケースから
3. 学会等名 お茶の水女子大学IGSセミナー「移住労働者の子どもたち」2021年10月30日 (オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原めぐみ
2. 発表標題 コロナ禍で育まれる紐帯：大阪・Minami こども教室の事例
3. 学会等名 関東社会学会2021年度第1回研究例会 2022年3月13日（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ogaya, Chiho
2. 発表標題 From Re-Integration to Re-Orientalion: Experiences of Filipino Women Returnee from Japan through Two Decades of Reintegration Program of NGO
3. 学会等名 IV ISA Forum of Sociology, Porto Alegre, Brazil (Virtual) , RC 46 Clinical Sociology, Session 12: Migrants/Refugees: Issues of Care, Integration, and Belonging (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原めぐみ
2. 発表標題 外国にルーツをもつ子どもたちを対象にした学習支援教室の役割：子どもたちによる「居場所」の評価
3. 学会等名 異文化間教育学会第41回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 高谷幸編、榎井縁、安岡健一、原めぐみ、高田一宏、金光敏、ラボルテ雅樹、稲葉奈々子、志水宏吉、河村倫哉、遠藤知子、樋口直人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 多文化共生の実験室	

1. 著者名 日本子どもを守る会編（原めぐみが分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 子ども白書 2021	

1. 著者名 鈴木江理子編、原めぐみ、山野上麻衣、巢内尚子、高向有理、田中雅子、呉泰成、明戸隆浩、佐藤美央、鄭安君、宋恵媛、金昌浩、南川文里、旗手明、田中宝紀、大川昭博、土井佳彦、山岸素子、坂本啓太、石川えり、崔洙連、加藤真、近藤敦、是川夕	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 316
3. 書名 アンダーコロナの移民たち	

1. 著者名 原めぐみ（駒井洋、小林真生編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 変容する移民コミュニティ（原めぐみ「ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン（JFC：国籍法改正を分岐点として）」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大野 聖良 (Ono Sera) (20725915)	お茶の水女子大学・基幹研究院・基幹研究院研究員 (12611)	
研究分担者	原 めぐみ (Hara Megumi) (90782574)	和歌山工業高等専門学校・総合教育科・准教授 (54701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------